

【一般演題3】 第14席

「医経における脈状浮・沈について」

京都 林 哲也

現代医学と中国医学とを比較すると、診察法、診断システムにおいて明らかな相違がある。前者の場合、情報を検査機器によって定量化し、そのデータが診断の根拠として重視されるという点が特徴として挙げられ、またその結果として検査機器等の急速な進歩があるのである。これに対し、後者の場合、その歴史からはそのような発明を見いだすことが出来ない。しかしそのかわりに、人体から発せられる情報は、五感を駆使して直ちに感覚され、それによって直ちに診断されるという独自のシステムが形成、発展してきた。

このように、中国伝統医学においては、診察における五感の重要性という点で、現代医学と異なった内容の四診法が展開するのである。なかでも、この医学の象徴ともいべき脈診は、脈が、身体の構成要素の一つとして認識されることによって身体状態を表象し診断の指標として即把握されるべき内容であることから、特別な位置を占めるものである。この歴史性をふまえて脈診を考えようとしたとき、原典の時代より今日に至るまでの主要な医学書における一連の変遷を整理、検討する必要がある。

しかしながら、一言に脈診といっても、その歴史的技法は多彩で容易に言及し得ないのである。臨床の際に、その裏付けとしてしばしば引用される『素問』『靈樞』ですら、脈診一つとっても現行のものとは繋がらない。まして後世の各々の医学書の内容が一貫して今日まで伝承しているとは考え難いのである。

今日まで脈状の定義をめぐって重要な役割を果たしてきたのはいうまでもなく『脈経』である。とりわけその巻頭におかれた24脈状の記載は、その後の長い脈診の歴史において決定的な規範とされてきた。しかしながら、『脈経』を詳細に検討すると24脈状の部分とその他の諸経を引用したとされる部分には必ずしも一貫した連続性は認められない。即ち、現在脈状の研究において重要なことは24脈状のイメージである。これが明らかにきれてこそ24脈状自体との関連も明らかとなり、ひいては『脈経』総体がめざすところの脈診の構造も明らかとなるであろう。そこでこのたびの検討においては『脈経』の諸引用部分を対象として、そこにみられる浮・沈の脈状を分類、調査することにより、これまで明らかではなかった『脈経』の主体部分における脈診の全体像研究の一助とするものである。